



4号機

3号機

2号機

1号機

原発

福島第1 事故5年

無謀の果て

●事故発生から5年が経過した今も福島原発は既に高レベル汚染水は2010年2月25日(本誌「ターナー」一頁から、三浦伸彰撮影)。
 ●燃料の溶融が生じた。建屋破壊、1、3、4号機の原子炉建屋上部は激しく損壊しています。大きな損壊をまねかれた2号機も、プロアフトパネルが開口し、そこから大量の放射性物質が放出されました。原子炉建屋の手前の各号機タービン建屋の屋上には、爆発で飛んできたがれきが散見し、大きな穴も見えます(右から1、2、3、4号機) = 2011年3月20日ごろ(東京電力提供)



あのとき、何が...

2011年3月11日

外部電源を喪失。非常用ディーゼル発電機による炉心や使用済み核燃料プールの冷却を開始

全電源を喪失 使用済み核燃料プールの冷却・注水機能を失う	直営バッテリー以外の電源を喪失 15-20 原子炉隔離時冷却系による注水冷却	全電源を喪失 15-20 原子炉隔離時冷却系による注水冷却	全電源を喪失 炉心の冷却・注水・減圧機能喪失 水位が低下して空だき状態になり、核燃料が損傷 水蒸が大量発生
---------------------------------	--	-------------------------------------	--

13日

242 X
バッテリー枯渇により炉心の冷却・注水・減圧機能を失う
水位が低下して空だき状態になり、核燃料が損傷
水蒸が大量発生
格納容器へ水

15日

61425
東京電力の資料などをもとに作成

廃炉 険しき道

東京電力福島第1原発事故が起きてから5年。日々新たな発生する放射性汚染水への対応を、いまだ緊急事態が続いています。安全確保にとりつかれた国と電力会社の無謀な原発推進の果てに、いったい何が起り、これからどうなっていくのか。無類な姿をさらす4号機の状態をまよました。(原発「取材班」)

吸排と目撃し、現場に下には高レベルの汚染水、放射性物質がたまり、過酷な放射線環境など、廃炉作業は極めて困難と見られています。

「40年あきまでではなく、それ以上か、最大限の努力を」ということだ。林幹雄は、今月6日、NHKの記者会見で、30年以内の廃炉を目指すという目標を掲げ、大規模の放射線防護が実現し、汚染水の処理と、核への道の険しさを示した。

廃炉とは、原子炉建屋の解体、放射性物質の除去、汚染水の処理など、極めて困難な作業を指す。福島第1原発では、事故発生後、1号機から4号機まで、炉心の溶融が確認された。また、地震・津波で炉心の位置がずれ、冷却機能が失われ、炉心が溶融した。また、炉心の位置がずれ、冷却機能が失われ、炉心が溶融した。

「40年あきまでではなく、それ以上か、最大限の努力を」ということだ。林幹雄は、今月6日、NHKの記者会見で、30年以内の廃炉を目指すという目標を掲げ、大規模の放射線防護が実現し、汚染水の処理と、核への道の険しさを示した。

近づけぬ原子炉建屋 溶融燃料どこに

燃料デブリなし 548体 (94%)
 溶融燃料あり 548体 (94%)

燃料デブリなし 548体 (94%)
 溶融燃料あり 548体 (94%)

燃料デブリなし	548体 (94%)	548体 (94%)	400体 (68%)
溶融燃料あり	548体 (94%)	548体 (94%)	400体 (68%)
格納容器内の総量	1万6500t	1万6000t	1万2100t

格納容器内の総量 最大約11シーベルト/時 最大約73シーベルト/時 4.1~9.7シーベルト/時

テレビラジオ番組表は8面

2011年3月